

鹿毛 敏夫（日本史学）

戦国大名の外交と都市・流通 —豊後大内氏と東アジア世界—

本論文は、戦国大名大友氏の外交と都市・流通に関して、東アジア世界との関係から考察を加えたものである。

本論は、中世都市豊後府内の構造と特質を論じた第一部、大友氏の流通政策について論じた第二部、大友氏と東アジア世界の関係を論じた第三部からなる。

第一部第一章では、16世紀代における豊後府内の大友氏館の建設と都市支配について論じている。考古学と文献史学双方の資料により、1544年に都市の中心部に蔵を、1547年にその隣接地に府内館を建設したことを明らかにした。

第二章では、年貢等の物資の収納施設である大友氏の蔵の存在と機能及び蔵方役人について論じている。関係史料が16世紀中後期に集中的に検出されること、収納米等をより効果的に投資・運用するための経済政策を行っていること、蔵毎に年間の収支状況を報告する勘定状が蔵方役人の手により作成され、年1度大友氏によって監察を受けていることを明らかにした。

第三章では、豊後府内の祇園会と大友氏の関係について論じている。16世紀代の府内祇園会は、豊後の二大祭礼の一つになっており、多数の民衆が参加すると共に、大友氏も家臣団を率いて祭礼を見物するなど、大友氏領国の住人を惹きつける一大宗教行事となっていたことを明らかにした。

第二部第一章では、大友氏と川の水運・治水の関係を論じている。大友氏は、川の鮎・鯉といった漁業資源を確保し、材木等の物資を効率的に運送する手段として川を利用し、川から取水して灌漑用の井手を造成するなど、様々な面で川を活用していることを明らかにした。こうした大名権力による川の利用については、従来ほとんど研究がない分野である。

第二章では、大友氏の大名船と海の領主の港町・流通支配について論じ、15世紀初めから大友氏が大名船を所有し、瀬戸内海の物資輸送に利用していたこと、大友水軍として知られる若林氏が港町佐賀関の支配や物資輸送に関与したことを明らかにした。

第三章では、中世末期の豊後府内の計屋と度量衡について、考古学資料と文献史料双方を用いて論じた。16世紀後半の銀流通の活発化に伴い、豊後府内にも計屋が登場し、大友氏によって統括され、領国内の計量の標準化が推進されたことを明らかにした。

第三部第一章では、戦国期豪商というべき嶋井宗室・天王寺屋道叱と大友氏の関係、豊後府内の豪商仲屋宗悦と大友氏の関係について論じた。大友氏は、領国内外の豪商の本来的経済活動を保護することを通して、流通の側面だけではなく、商人・職人の統括や政治的活動にも利用したことを明らかにした。

第二章では、15・16世紀の大友氏と日明貿易・琉球貿易・南蛮（東南アジア）貿易の関係について論じた。大友氏は、日明勘合貿易に対して親繁代から義鑑代まで歴代関与していること、輸出用硫黄の調達を行うための陸上・海上ルートの整備を行っていること、16世紀代になると、新たに琉球貿易・日明密貿易・東南アジア貿易にも参画したことを明らかにした。

以上のように、本論文は、戦国大名大友氏の外交と都市・流通政策に関して、様々な新知見を提示している。よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。